

老松

文政3年(1820)に四世杵屋六三郎(六翁)が長唄曲として作曲しました。長唄中興の祖とたたえられ、「勸進帳」「俄獅子」など多くの名曲を生み出した六三郎が、芝居の伴奏曲ではなく、純粹に演奏曲として作曲したものです。六三郎が母の八十歳の祝いに作曲したともいわれます。

失脚した菅原道真を慕い、配所である築紫の安楽寺に飛んだという老松の精がシテをつとめる同名の謡曲をもとに、その詞章を取り入れながら、廓の情趣を加えています。常磐津節、富本節、清元節、一中節にも同名の曲があります。

太平の世を寿ぎ、百年に一度花が咲くことを十回繰り返す「十返りの松」、その水を口にすれば長生きがかなう「長生の泉」など、めでたいもののあれこれを唄い、安楽寺の風景を描写します。その後、「松」と「待つ」をかけた「松という文字は変われど待つ言の葉の」というクドキになり、「清きいさめの神かぐら」で神楽の合方の神舞が入り、格調のある振りを見せます。

それが「松の太夫のうちかけは」から一転し、廓の風情が漂います。老人の姿をした老松の精が主役である謡曲からは遠く離れますが、長唄「雨の五郎」で曾我五郎に廓通いをさせたように、なんでも廓と結びつける時代の大らかな気風がうかがえます。

「いとし可愛もみんなみんな男は偽りじゃもの 拗ねて見せてもそのままよそへ」と色気のある詞章が続き、踊り手も艶のある手踊りを見せます。

最後の「ゆたかに遊ぶ鶴亀の齢を授くるこの君の行く末守れと我が神託の」は、再び謡曲から歌詞を取り込んであり、振りも仕舞に近いものとなります。

荘厳さあり、しっとりとしたところありと、変化がおもしろい曲です。